

活動発表し意見交換 デジタル公民館けせん 陸前高田で連絡会開く



▲ 気仙両市の各団体が会し、それぞれの活動について報告し合った

東京都の一般財団法人・高度映像情報センター（AVCC、久保田了司理事長）は8日、陸前高田市広田町の長洞元気村で「『デジタル公民館けせん』地域間連絡会」を開催した。東日本大震災後にAVCCが復興支援事業などでかかわる気仙両市の8団体が参加し、各団体の取り組みや課題などについて報告し合った。

AVCCは通信ネットワークやコンピューターといった高度映像情報メディアの利用と提供に関するコンサルティング、民設民営のデジタル公民館「霞が関ナレッジスクエア」事業などを展開。本年度から県による「被災者の参画による心の復興事業」の採択を受け、地域コミュニティの形成や地域振興に気仙全域で取り組む「デジタル公民館けせん」事業を実施している。

地域間連絡会は、参加団体の活動状況と課題についてそれぞれ発表し合い、情報交換を通してそれぞれの地域振興活動に理解を深めようと開催。今回は、大船渡市から末崎地区公民館、PC・スマホ教室、多世代交流館・居場所ハウス、どこ竹三鷹inまっさき、碯石地区復興まちづくり協議会・浜の停車場プロジェクトチーム、田ノ頭オレンジカフェ、陸前高田市からは気仙大工左官伝承館と一般社団法人・長洞元気村が参加。AVCCのスタッフらも含め、約40人が集まった。

はじめに、各団体の代表者がこれまで取り組んできた活動の成果や課題、今後の目標を発表。活動中の写真やその様子が掲載された新聞記事などを用いながら、自分たちが実施している地域振興活動などについて報告した。

このあと、各団体の代表的な取り組みを撮影した映像をスクリーンで放映。参加者たちは、今後の自分たちの取り組みに生かそうと、ほかの参加団体の活動について質問をしたり、積極的に意見を述べるなどして情報を交換した。

久保田理事長（69）は「隣同士の市町でも、そこにどんな団体があって、どんな取り組みをしているか知られていない。各地域で活動する団体同士がつながることで、よりよい活動を展開することができる。この事業を通して、気仙の魅力などインターネットを通じて世界中に発信していきたい」と話していた。